

Monster Patterns of Northern Culture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yagi, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057298

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



北方系文化の怪獣紋

八木 聡

(草原考古研究会・金沢大学大学院文学研究科修了)

I. はじめに

大興安嶺からブルガリアまで広がる草原地帯に盛行していた騎馬民族の文化では、しばしば装身具などに空想動物のモチーフが使われていた。空想動物の中にはグリフィンも見られるが、鳥の頭と鹿や獣を組み合わせた騎馬民族独自のものも見られる。この騎馬民族独自の空想動物がどのような名称で呼ばれていたか、現在では不明である。本稿ではこの空想動物のモチーフを怪獣紋と呼ぶこととし、その拡がりや地域間の関係について考察を行う。

II. 型式分類

まず怪獣紋の分類を行う。分類は枝角の先に鳥頭を描くものをⅠ型、角はなく鬣や尻尾の先などが鳥頭となるものをⅡ型とし、それぞれ細分していく。

Ⅰ A 型：体が鹿で表現される型式(図 1)。抽象化された鳥頭を上下逆に表現するものと、通常の向きで鳥頭を表現するものに細分でき、それぞれⅠ Aa 型、Ⅰ Ab 型とし、いずれにも当てはまらないものをⅠ Ac 型とする。Ⅰ Aa 型の資料としてクラスノヤル地域出土品(図 1.1) [B.B. Piotrovskii et al. 1986 No.284]、エリザベートフスカヤ(図 1.2) [W.Ginters 1928 p19 Taf.7c]、イレイチェヴェ 1 号墳 6 号墓坑(図 1.3) [B.B.Piotrovskii 1986 No.70]、フィリップフカ 3 号墳(図 1.4) [J. Aruz 2000 p167 No.104]、アクメチェット(図 1.5) [B. B. Piotrovskii et al. 1986 No.101]、ザヴァツカヤ古墳(図 1.6) [V.A.II'inskaia & A. I. Terenozhkin 1983 p115]、ウリヤップ 1 号墳(図 1.7) [W. Menghin et al. 2007 p210 No.6] を挙げる。

Ⅰ Ab 型ではフィリップフカ 1 号墳 1,2(図 1.8,9) [J. Aruz 2000 p74 No.1 view4, p126 No.64]、アクシュティンツィ 2 号墳(図 1.10) [E. V. Chernenko 1981 p49 Р и с .30]、ルーマニア出土銀杯(図 1.11) [I. Venedikov & T. Gerasimov 1973 No.149] を挙げる。Ⅰ Ac 型ではガルチノヴォ出土青銅製打出し型(図 1.12) [I. Venedikov

and T. Gerasimov 1973 No.152] がある。またイッシク・クルガン出土の金製飾板に、鬣の先が鳥頭の鹿が表現されているが(図 1.13) [K.A. Akishev 1978 p100 No.19]、Ⅰ A 型が変化したものとする。

Ⅰ B 型：嘴を表現する型式で a から d 型の 4 型式に細分する。まず、Ⅰ Ba 型は刺青に後ろ足を反転させる捻体動物紋で表現されたものとする(図 2.1-4)。枝角の鳥頭は基本的に同じ方向を向くが、中には鳥頭同士が向かい合うものも見られる(図 2.2,3)。資料として、バジリク 2 号墳男性被葬者 1,2(図 2.1,2) [S.I.Rudenko 1970 p263 No.130,131, p234 No.132]、アク・アラハ 3 号墓地 1 号墳男性被葬者(図 2.3) [N.V.Polos' mak 2001 p229 Р и с 151.6]、ヴェルフ・カルジン 2 号墓地 3 号墳男性被葬者(図 2.4) [Polos' mak 2001 p229 Р и с 151.6] を挙げる。Ⅰ Ba 型については、その特徴をよくあらわしている金製の立像が陝西省納林高兔で出土しており(図 2.5) [高濱・岡村 2000:323 頁 図 297]、Ⅰ Ba 型と同時期と考える。また西溝畔 2 号墓出土の飾板では、鬣の先のみが鳥頭の怪獣紋が描かれている(図 2.6) [伊克昭盟文物工作隊他 1986 356 頁 図 4.3]。

次にⅠ Bb 型だが、嘴のある怪獣を向かい合うように並べたものを帯飾板に表現したものとする。怪獣の背中には獣が噛み付いている。左右の角の先に描かれたグリフィンは互いに向かい合うように描かれ、触角型の短剣を想起させる。資料は内蒙古太僕寺旗出土金製帯飾板(図 3.1) [中國美術全集編纂委員會 2010 66 頁 金馬紋飾件]、テレーゼ & ハリス・コレクション 1(図 3.2) [J. F. So and E. C. Bunker 1995 p137 No.56]、ルー・コレクション 1(図 3.3) [A. Salmony 1933 Pl. X X III .4] を挙げる。

Ⅰ Bc 型は帯飾板に怪獣とその前足に襲いかかる獣を透かし彫りで表現した型式とする。資料はピョートル・コレクション 1(図 3.4) [M. I. Artamonov 1973 p147 No.193]、西岔溝出土品 1(図 3.5) [中國青銅器



図 1. 分類 1

全集編輯委員會 1995 78 頁 No.107]、呼倫貝爾出土品 (図 3.6) [楊暉 2004 94 頁 図 1.1,2]、ドルノゴビ・アイマグ出土品 (図 3.7) [E.Purevjav and E.Diimaajav 2011 p374 No.372]、レヴィー・ホワイトコレクション 1 (図 3.8) [東京国立博物館 1997 124 頁, 125 頁 No.212]、山西省博物館所蔵品 (図 3.9) [山西省博物館 1999 58 頁 No.110] を挙げる。バヤンホンゴル・アイマグで出土した青銅製帯飾板は (図 3.10) [E.Purevjav and E.Diimaajav 2011 p394,395 No.383,384]、嘴のある怪獣が獣に襲われている構図をとっており、I Bc 型との関連がうかがえる。ただ、襲っている獣も角 (もしくは耳) や鬣の先が鳥頭で表現されている点は興味深い。また、カタンダ・クルガンでよく似た構図の木製帯飾板が出土しており (図 3.11) [M. I. Artamonov 1973 p149 N.196]、この資料が I Bc 型の祖形である可能性が考えられる。

最後にどの型式にも当てはまらないものを I Bd 型としてまとめる。本稿では百楽氏 34 号墓出土の模 1 (図 4.1) [陝西省考古研究所 2006 彩版 3.1]、燕下都出土金製飾板 (図 4.2) [河北省文物研究所 1996 718 頁 図 416.3]、茂陵出土の香炉 (図 4.3) [筆者撮影]、章丘洛荘 9 号坑出土金製飾板 (図 4.4) [済南市考古研究所他 2004 図版 貳.5]、太僕寺旗出土の鉄剣を (図 4.5) [中國美術全集編纂委員會 2010 66 頁 金柄鉄剣]、この型式とする。この型式で興味深いのは太僕寺旗出土の

鉄剣である (図 4.5)。金製の鞘に I B 型の怪獣紋が描かれているが、このような剣の出土例は他に例がない。

I C 型：体が馬で表現されるもの。本稿では a から e まで 5 つの型式に細分する。最初に I Ca 型だが、長方形帯飾板の縁に巡らした二重縄目紋の中に、怪獣を捻体動物紋で描かれていたものとする。三营郷 (図 5.1) [寧夏固原博物館 2004 52 頁 No.17]、百楽氏 34 号墓出土の陶模 2 (図 5.2) [陝西省考古研究所 2006 彩版 1.2]、ルー・コレクション 2 (図 5.3) [A. Salmony 1933 Pl. XXVI. 4] を挙げる。筆者は東京国立博物館の展覧会で百楽氏 34 号墓出土模を実見し、使用による磨滅が見られたこと、遺跡の立地から、秦の領域で北方的な帯飾板が造られていたと考える。

I Cb 型は長方形の帯飾板に二匹の怪獣を背中合わせに配置したもので、西岔溝出土品 2 (図 5.4) [E. M. Bunker 1997 p79 Fig.A111]、銀山嶺出土品 (図 5.5) [広西壮族自治区文物工作隊 1978 図版 8] に見られる。次に I Cc 型だが、捻体動物紋の怪獣と、それに噛み付く獣を帯鉤に描いたもの。多くは左右一対で残っている。角は怪獣の頭の上で前後に別れ、その先の鳥頭が互いに向かい合うように表現される。角の生え際に列点紋が見られる。資料は獅子山楚王陵 1 (図 5.6) [日本放送協会他 2000 129 頁 No.75]、獅子山楚王陵 2 (図 5.7) [東京国立博物館他 2004 84 頁 No.63]、三店村 (図 5.8) [筆者撮影]、ボクロフカ (図 5.9)



※縮尺不同

図 2. 分類 2

1 パジリク 2 号墳男性被葬者 1 2 パジリク 2 号墳男性被葬者 2 3 アク・アラハ 3 号墓地 1 号墳男性被葬者
4 ヴェルフ・カルジン 2 号墓地 3 号墳男性被葬者 5 納林高兔 6 西溝畔 2 号墓

[J.Davis-Kimball and L.T.Yablonsky 1995/96 P15 Pl.7]、MIHO MUSEUM(図 5.10) [MIHO MUSEUM 1997 216 頁 No.110]、ジョセフ・ファインアート(図 5.11) [E. C. Bunker et al. 2002 p101 No.68]、メトロポリタン美術館(図 5.12) [E. C. Bunker et al. 2002 p107 No.75]、テレーゼ & ハリスコレクション 2(図 5.13) [J. F. So and E. C. Bunker 1995 p144 No.64]、東博 TJ-5716-1,2(図 5.14,15) [東京国立博物館 2005 31 頁 口絵 18] に見られる。また I Cc 型と同様の構図が用いられている I B 型が東黒溝 12 号墓で出土している(図 5.16,17) [新疆文物考古研究所他 2009 22 頁 図 32. 1-6,10, 哈密博物館 2013 193 頁 銀牌飾, 192 頁 金牌飾]。この飾板の怪獣には嘴が表現されているが、I Cc 型とどのような関係かは不明であり、その理由は後に述べる。上記の型式の他に中原的な器に怪獣紋を表現するものを I Cd 型、馬の額を飾る当盧に怪獣紋を表現するものを I Ce 型とする。I Cd 型では北山頭 1 号墓 1,2 を(図 5.18,19) [安徽省文物考古研究所他 2007 112 頁 図 80.2, 113 頁 図 81]、I Ce 型では章丘洛莊 9 号坑出土品(図 5.20) [済南市考古研究所他 2004 図版 2.1]、保安山 2 号墓 1 号陪葬坑出土品(図 5.21) [河南省商丘市文物管理委员会 2001 56 頁 図 25.5] を挙げる。

I D 型：体が獣で表現されるもの。透かし彫りの帯飾板に表現するものを I Da 型、長方形の帯飾板に表現するものを I Db 型、両型式に当てはまらないものを I Dc 型とする。I Da 型では西岔溝 3(図 6.1) [孫 1960 33 頁 図 4]、齊齊哈爾市大道三家子(図 6.2) [黒龍江省博物館他 1988 図版参 .6]、アルハンガイ・アイマグ(図 6.3) [E.Purevjav et al. 2011 p397 No.385]、マリヤソヴァ(図 6.4) [M. A. Devlet 1980 p64 Т а б л и ц а 28.114]、サックラー・コレクション(図 6.5) [東京国立博物館 1997 128 頁 No.216]、ワニーク・コレクション(図 6.6) [E. C. Bunker 1997 p273 No.241]、

マイケル・ダン・コレクション(図 6.7) [E. C. Bunker et al. 2002 p103 No.71] を挙げる。I Db 型では縄目紋様で縁取りしたものと縁がないものがある。縄目紋で縁取りしたものは徐州劉執墓出土品を(図 6.8) [徐州博物館 1997 16 頁 図 37] を、縁がないものは西岔溝出土品 4,5(図 6.9,10) [E. M. Bunker 1997 p78 Fig.A110, 富山県他 1989 15 頁 No.7]、湖北省明清村出土品(図 6.11) [楊・李 2010 封二 . 1,2] を挙げられる。徐州劉執墓出土品は怪獣の上部に空白を埋めるように鳥頭を並べているが(図 6.8)、それ以外の資料は羚羊と鳥頭を交互に描いている(図 6.9-11)。上記の他、いずれにも当てはまらない I Dc 型として、ピョートル・コレクション 2(図 6.12) [M. I. Artamonov 1973 p131 No.178]、ザポロジエ・クルガン出土の金製帯飾(図 6.13) [A. P. Mantsevich 1976 p167 Р и с 3, p166 Р и с 2]、ピョートル・コレクション 3 を挙げる(図 6.14) [M. I. Artamonov 1973 p139 No.188]。特にピョートル・コレクション 2 とザポロジエ・クルガンの金製帯飾は構図が類似しており、関連がうかがえる。また草原地帯東部では、トゥエクタ 1 号墳で鹿の角をもつ獣が革製品に表現されている(図 6.15) [S.I.Rudenko 1970 p270 No.137-B]。戦国時代後期の阿魯柴登出土金製品にも、体が獣の怪獣紋が表現されていることから(図 6.16) [田・郭 1986 345 頁 図 2.1]、本稿の I D 型はアルタイのパジリク文化から中国国内に伝わり発展したものとする。この流れとザポロジエ・クルガンの帯飾がどのような関係にあるかは、不明である。

最後に上記のどの型式にも分類できない I 型を I E 型とし、ノイン・ウラ 6 号墳出土絨毯(図 6.17) [梅原末治 1960 PL.X VI]、パジリク 2 号墳出土立飾(図 6.18) [J. Aruz 2000 p271 No.195 view2]、燕下都出土珙(図 6.19) [河北省文物研究所 1996 彩版 26.2] を挙げる。

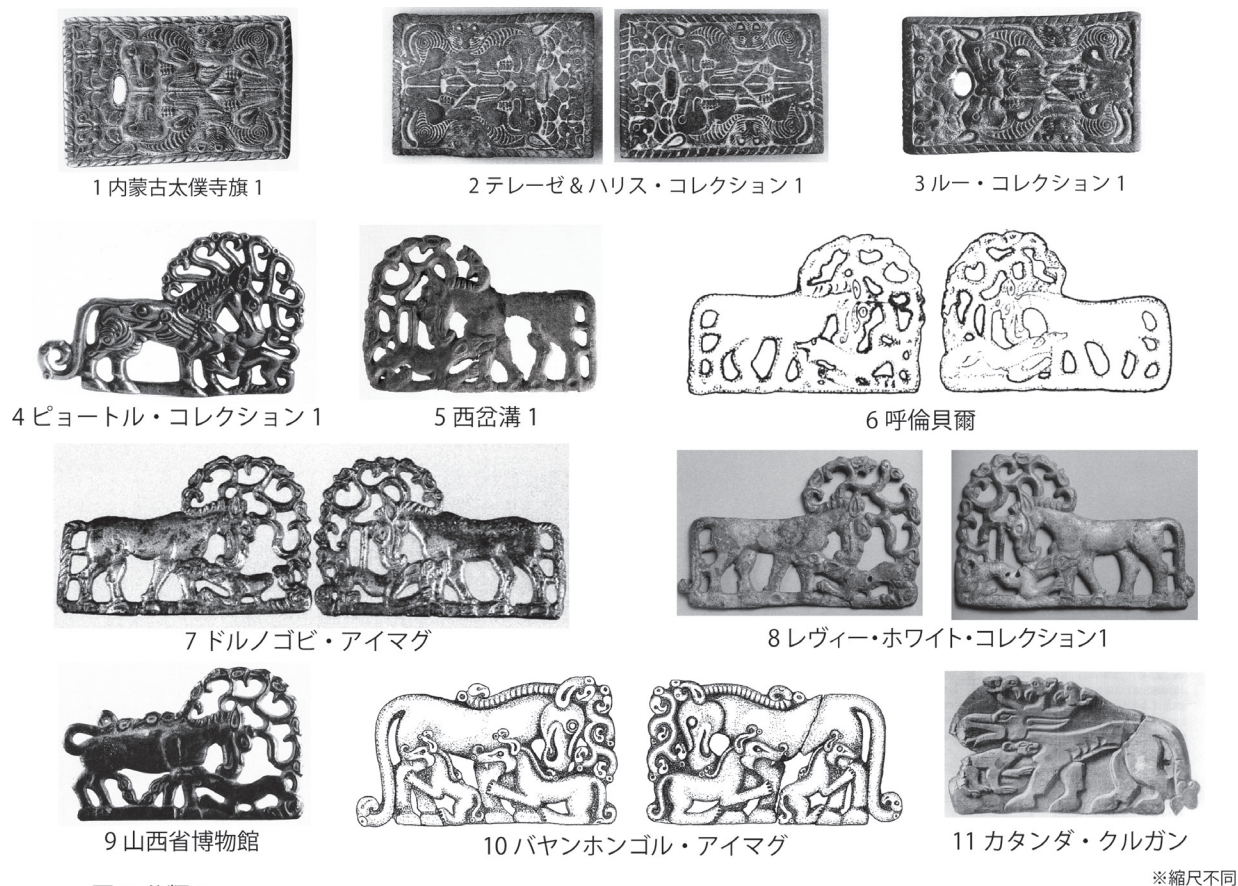


図 3. 分類 3

Ⅱ型は、体が獣で表現されるもの、馬で表現されるもの、頭の後ろから鼻にかけて伸びた鬣の先に鳥頭を表現するものを、それぞれ A、B、C 型とし、さらにそれぞれの型式で細分する。

Ⅱ A 型は獣の体をするもので、a から d 型まで、4 つの型式に分けられる。まずⅡ Aa 型は刺青に表現されたもので、鬣の先が鳥頭となる。パジリク 2 号墳男性被葬者 1,2,3 を挙げる (図 7.1-3) [Rudenko 1970 p262 No.129, p260 No.126,127]。Ⅱ Aa 型と同様の特徴をもった革製品がウランドウリクで出土している (図 7.4) [福岡市博物館他 2005 p68 No.96]。次にⅡ Ab 型だが、怪獣が草食動物を襲っている場面を帯飾板に表現したもので、鬣と尻尾の先が鳥頭となる。馬家塬 14 号墓出土品 1,2 (図 7.5,6) [早期秦文化联合考古隊他 2009 表紙, 38 頁 図 34]、陳陽川村出土品 (図 7.7) [寧夏固原博物館 2004 56 頁 No.21]、中近東文化センター (図 7.8) [東京国立博物館 1997 108 頁 No.191]、キャロンダ・コレクション 1 (図 7.9) [J.F.So and E.C.Bunker 1995 p132 No.50]、白楊林村出土品 (図 7.10) [寧夏固原博物館 2004 55 頁]、吐魯蕃市艾丁湖出土品 (図 7.11)

[李蕭 2006 59 頁 下図] がこの型式にあたる。

Ⅱ Ac 型は、怪獣とグリフィンの闘争の場面を帯飾板に表現した型式とする。資料はデレストウイ墓 (図 7.12) [M. A. Devlet 1980 p65 Таблица29.115,116]、枣廟 25 号墓 (図 7.13) [陝西省考古研究所 1986 10 頁 図 14.17]、翁牛特旗 (図 7.14) [龐昊 1998 42 頁 図 3, 図 4] を挙げる。ピョートル・コレクション 4 (図 7.15) [高濱・岡村 2000 341 頁 No.407] も怪獣とグリフィンの闘争を描いており、Ⅱ Ac 型と関連した資料と考える。

そして、Ⅱ A 型でこれまでのいずれの型式にも当てはまらないものをⅡ Ad 型とし、原州区潘家莊 (図 7.16) [寧夏固原博物館 2004 p54 No.19]、パキスタンのカラコルム出土品 (図 7.17) [G.Parzinger 2002 p76 Р и с 15.1]、アフガニスタンのクルコヴァ 2 号墳出土品 (図 7.18) [S.Y.Gutsalov 2010 p59 Р и с 6.1]、ウシャコフスカ古墳 (図 7.19) [V.P.Shilov 1966 p186 Р и с 8]、ウリヤップ 4 号墳 (図 7.20) [W. Menghin et al. 2007 p212 No.10]、ドボリイ・テ・ジョス (図 7.21) [A. Vulpe 1990 Tafel16.78]、オーストラヤ・モギーラ (図 7.22) [W.Ginters Tafel4.b]、ピョートル・コレクション 5・

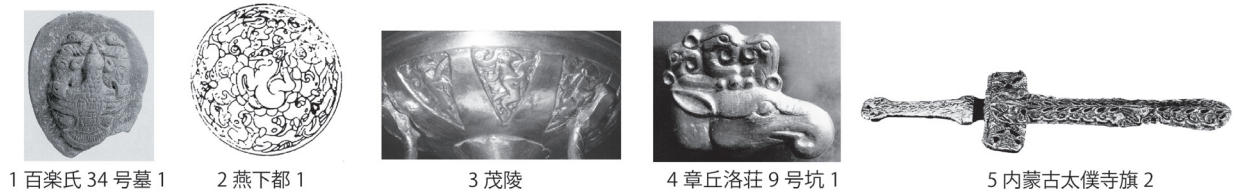


図 4. 分類 4

※縮尺不同

6(図 7.23,24) [J. Aruz 2000 p286 No.208, W. Menghin et al. 2007 p53 No.4] を挙げる。

Ⅱ B 型：体が馬で表現される型式で a,b の 2 型式に細分する。Ⅱ Ba 型は長方形帯飾板に表現するもので、倒墩子墓地 1,2,3(図 8.1,2,3) [E. C. Bunker1997 p83 Fig. A122 上図, 寧夏文物考古研究所 1988 p344 図版拾伍 .5, 中國青銅器全集編輯委員 1995 86 頁 No.120]、彩嵐村 1,2(図 8.4,5) [吉林省文物志編委會 1987 図版玖 .8,9]、梧野里土取場 1 号墳 (図 8.6) [梅原・藤田 1986 圖版七五 .314,315]、西岔溝 6(図 8.7) [富山県他 1989 16 頁 No.8]、キャロンダ・コレクション 2(図 8.8) [東京国立博物館 1997 130 頁 No.220]、9 テレーゼ & ハリスコレクション 3(図 8.9) [J. F. So and E. C. Bunker 1995 p145 No.66 a,b]、綏徳出土品 (図 8.10) [予・戴 1985 39 頁 図 1.8]、ルー・コレクション 3(図 8.11) [A. Salmony 1933 Pl. X X VII ,4] を挙げる。

Ⅱ Bb 型は香炉の蓋に表現するもので、后川村 2011 号墓出土品を挙げる (図 8.12) [中国社会科学院考古研究所 1994 140 頁 図 110.2]。北山頭 1 号墓で出土した器の圈足部分に Ⅱ B 型の怪獣紋が描かれているが (図 5.19)、中原的な遺物に北方的なモチーフを描くという点で、この型式と関連がうかがえる。また、体を馬で表現する Ⅱ B 型の資料はアルタイのサグラファジ Ⅱ -8 号墳でも出土しており (図 8.13) [A.D.Grach 1967 p230 Р и с 13.1]、パジリク文化で生まれた Ⅱ B 型が中国国内に伝わり、帯飾板や中原的な遺物に表現されるようになったと考える。

Ⅱ C 型：頭の後ろから鼻にかけて伸びた鬣の先が鳥頭になる型式で、本稿ではニンファエム 6 号墓出土品 (図 8.14)[M.Vickers 1979 PlateXVI]、ホシュウトヴォ出土品 (図 8.15) [W. Menghin et al. 2007 p193 No.13]、ソローハ出土品 (図 8.16) [A. P.Mantsevich 2007 K a т 39] を挙げる。

以上、簡単ではあるが怪獣紋の分類を行なった。こ

れらの型式の出土地を見て全体的に言えることは、本稿で扱う怪獣紋はユーラシア草原地帯の西端と東端に多く分布し、その間の地域ではほとんど見られないという点である (図 11)。Ⅰ 型については、Ⅰ A 型は草原地帯西部のみに見られ、Ⅰ B 型はアルタイ地域からモンゴル、中国東北部、渭水流域、山東省にかけての地域に分布する。Ⅰ C 型はボクロフカをのぞき中国国内でのみ出土し、Ⅰ D 型はザポロジエ・クルガン以外、ミヌシンスク地域、モンゴル、中国で出土する。Ⅰ 型はⅠ A 型以外、多くが草原地帯東部に集中している (図 12)。

Ⅱ 型は、Ⅱ A 型が草原地帯の東西で見られ、Ⅱ B 型は東部のみ、Ⅱ C 型は西部のみで見られる (図 13)。上記のことから、Ⅰ 型、Ⅱ 型ともに怪獣紋の表現に地域性が存在していることが分かる。

Ⅲ. 草原地帯東西の関係

資料の分類によって、分布が草原地帯の西部と東部にかたまっていること、怪獣紋の型式と出土地域に関連があることが分かった。当然草原地帯の東部と西部の関係が問題となるため、本章では怪獣紋における草原地帯の東西関係について考察を行なっていく。

まず東部における怪獣紋の年代だが、パジリクにおける 5 つの古墳の相対年代確立に用いられた、パジリク 2 号墳の木材をサンプルとし、C14 年代の測定が行われた。300 ± 25/−28 cal BC という結果が出ている [I.Hajdas et al. 2004 p111]。

一方、西部のフィリップポフカにおいても木芯金張の立像を用いて C14 年代の測定が行われているが、値にかなりバラツキがあり、数値をそのまま用いることは出来ない [J. V. D.Plicht 2004 p53 Table1]。しかし、この 1 号墳を含むフィリップポフカ第一古墳群では怪獣紋を用いた遺物が複数出土しており (図 1.4,8,9)、怪獣紋の展開を考察するうえで、重要な遺跡と考える。そこでまず、フィリップポフカ 1 号墳と 4 号墳出土の鉄

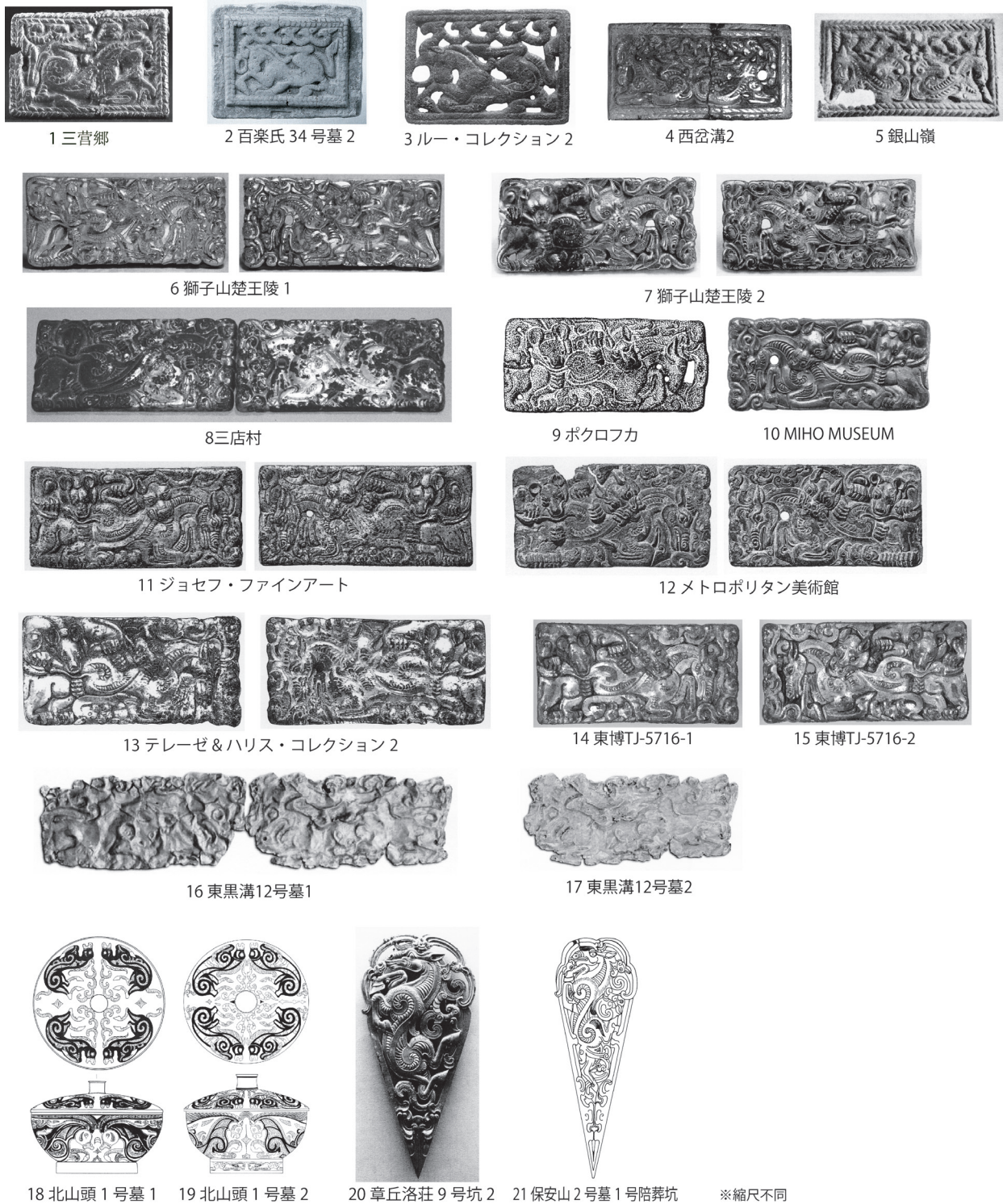


図 5. 分類 5

製剣からその年代を考察する。

フィリップフカ 1 号墳出土の鉄製剣は、向かい合うグリフィンを柄頭に表現する、触角型と言われる剣である (図 9.1) [J. Aruz 2000 p81 No.6 detail]。触角型の多くは鳥の頭を向かい合わせるが、フィリップフカ 1

号墳のようなグリフィンを向かい合わせるものが毛慶溝 59 号墓で出土している (図 9.2) [内蒙古文物工作队 1986 258 頁 図 30.1]。両者はグリフィンの首の付け根を鋭く上方に尖らせている点も類似する。また、フィリップフカ 1 号墳出土の剣は鍔に柄頭のグリフィ

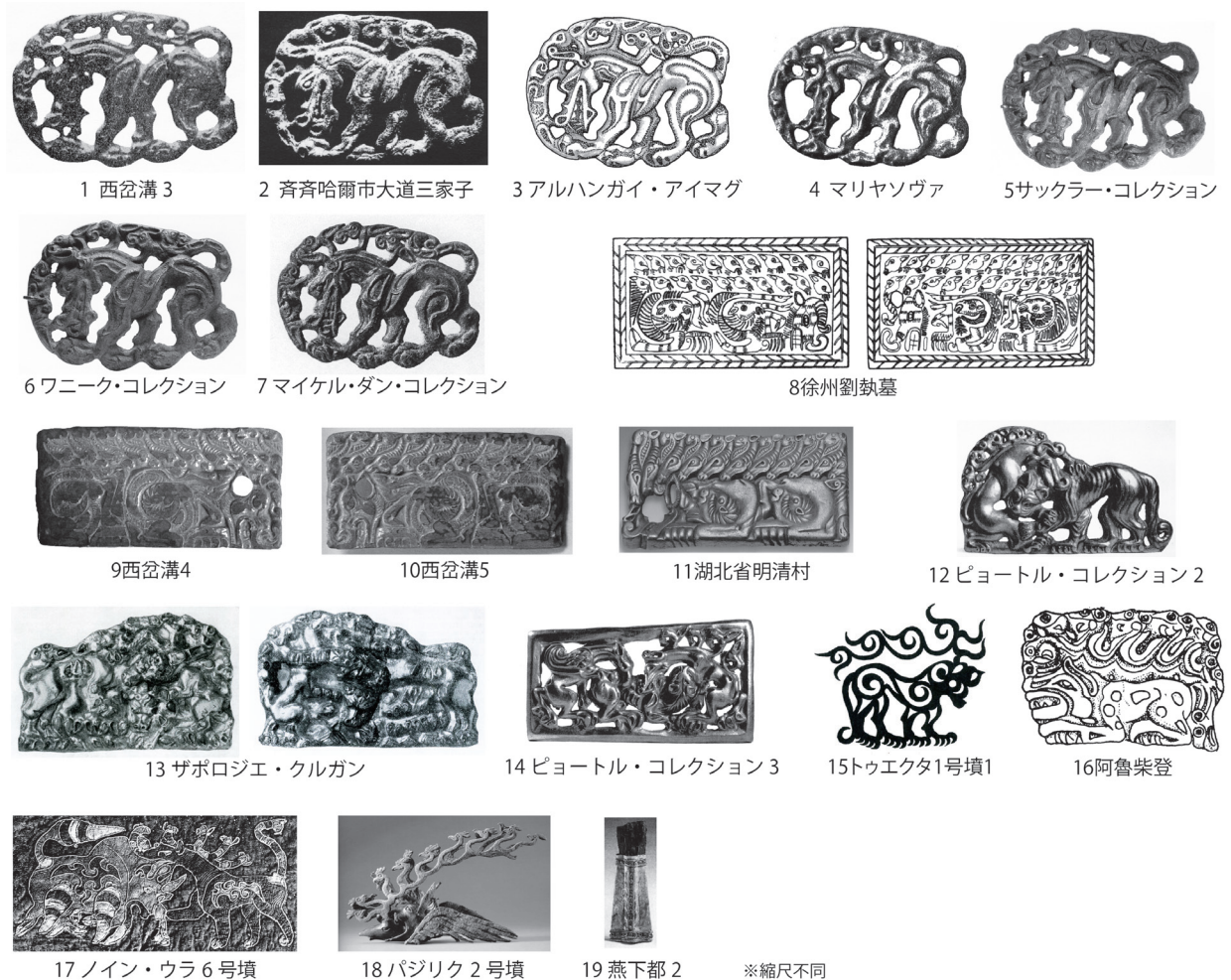


図 6. 分類 6

ンを上下反転させたものを表現しており、これと類似する短剣がアルタイのウランドゥリクで出土している (図 9.3) [福岡市博物館 2005 45 頁 No.46]。毛慶溝 59 号墓は春秋後期と考えられており [内蒙古文物工作隊 1986 300 頁]、フィリップフカ 1 号墳の年代も前 5 世紀と考えられる。

同様の年代はフィリップフカ第一古墳群 4 号墳出土の鉄製剣からも導き出される (図 9.6) [L.T.Yablonsky 2014 Рис5.1]。この剣は鏢に向かい合う獣を上下反転させて描いており、類似した青銅製の触角型短剣がミヌシンスク地域で出土している (図 9.7) [高濱・岡村 2000 347 頁 No.432]。山羊を柄頭で向かい合わせ、首の付け根をフィリップフカ 1 号墳の鉄製剣、毛慶溝 59 号墓・ウランドゥリク出土の短剣同様に、鋭く上方に尖らせている。この短剣は前 5 世紀に遡るタガール文化に属すると考えられていることから [高濱・岡村 2000 347 頁, 348 頁]、フィリップフカ 4 号墳も前 5

世紀まで遡りうる。

以上のことから、フィリップフカ第一古墳群の年代が前 5 世紀まで遡りうると同時に、草原地帯西部における怪獣紋の年代も前 5 世紀まで遡ることが分かった。パジリク 2 号墳の年代が遡っても前 4 世紀であることから、怪獣紋は草原地帯西部から東部へと伝播したと考える。同様のことはラクダとグリフィンのモチーフにおいても言える。フィリップフカ 1 号墳出土の金製品には、トサカ状の毛をもつラクダが表現されている (図 9.8) [J. Aruz 2000 p157 No.96]。同様な特徴をもった木製のラクダが、パジリク文化に属するトゥエクタ 1 号墳で出土している (図 9.9) [J. Aruz 2000 p255 No.178]。また、フィリップフカ 1 号墳で出土するラクダの毛と、グリフィンの嘴を組み合わせたものも、トゥエクタ 1 号墳、甘肅清水劉坪で出土している (図 9.10,11) [J. Aruz 2000 p255 No.177, 甘肅省文物考古研究所他 2014 178 頁 No.118-2007]。これは草



図 7. 分類 7

原地帯西部から東部への紋様の伝播を裏付けていると同時に、I B 型もトサカ状の毛をもつグリフィンと同様、西部の怪獣紋にフィリップポフカ 1 号墳墓出土角型剣のグリフィンが組み合わさった結果と考える。

IV. 怪獣紋の起源

これまで見てきたことから、草原地帯西部から東部への影響が存在していたことが分かった。では、怪獣紋の起源は草原地帯西部かと言うと、興味深い資料が存在する。それは、玉皇廟 174 号墓で出土した青銅製飾板である (図 10.1) [北京市文物研究所 2007 1239 頁 図 724.1]。体は鹿だが尻尾の先は鳥の頭で表現されている。尻尾の先が鳥頭ではない青銅製飾板が玉皇廟 175 号墓で出土していることから (図 10.2) [北京文物

研究所 2007 図版 347.4]、鹿とは異なる意味合いをもたせた可能性がある。玉皇廟 174 号墓の年代は出土した短剣から春秋中期 (前 6 世紀) と考える [八木 2014 130 頁]。鳥頭との合成という点では、草原地帯西部でも玉皇廟 174 号墓と同時期頃である、ウルスキー・アウル古墳群出土の竿頭飾に、レイヨウと鳥頭の合成獣が見られる (図 10.3) [W. Menghin et al. 2007 p205 No.1]。レイヨウの喉と尻尾に鳥頭が合成されている。おそらく、このレイヨウと鳥頭の合成獣は朝陽袁台子 123 号墓の飾板 (図 10.4) [遼寧省文物考古研究所 他 2010 彩版 2] や、メドギディア出土の青銅製品 (図 10.5) [W. Menghin et al. 2007 p307 No.3] から派生したものと考えられる。上記のことから、草原地帯の東部と西部でほぼ同時期に、動物と鳥の合成獣が見られる

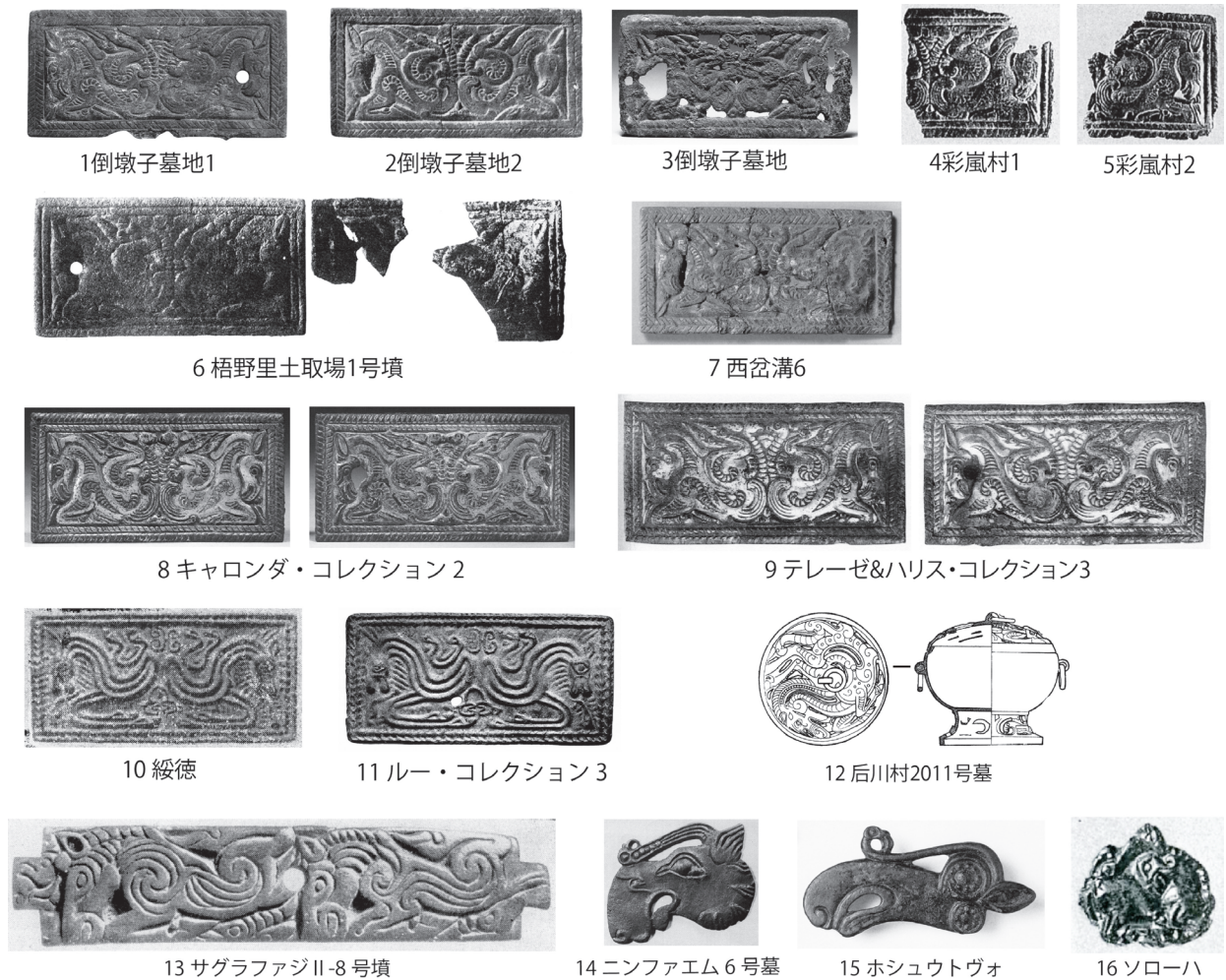


図 8. 分類 8

※縮尺不同



図 9. 関連資料 1

1 フィリップポフカ 1号墳 3 2 毛慶溝 59号墓 3 ウランドウリク 4 ソロフカ 5 バヤンホンゴル 6 フィリップポフカ 4号墳 7 ミヌシンスク 8 フィリップポフカ 1号墳 4 9 トゥエクタ 1号墳 2 10 トゥエクタ 1号墳 3 11 清水劉坪

ことが分かったが、その背景として東西の交流が存在していたことも視野に入れるべきである。また、玉皇廟 174 号墓やウルスキー・アウル古墳群の資料が本稿で扱う怪獣紋に発展する過程で、角に触角型短剣の要素も加わっていると筆者は考える。以下、具体的に見ていく。

まず、触角型短剣は柄頭に鳥頭やグリフィンを上

下反転して向かい合わせるものと (図 9. 4, 5) [K. F.Smironov 1961 p104 Рис4.1, E.Purevjav and E.Diimaajav 2011 p285 No.291]、通常の向きで向かい合わせるものに分類できる (図 9.1-3, 7)。怪獣紋も角の鳥頭を上下反転させるものと (図 1.1, 2, 4, 6, 7)、通常の向きのものがあり (図 1.8, 10、図 2.2, 3、図 3.1-3, 4, 11、図 4.4、図 5.6-15、図 6.16-19)、触角型と対応する。怪獣紋の角



1 玉皇廟 174 号墓 2 玉皇廟 175 号墓 3 ウルスキー・アウル古墳群 4 朝陽袁台子 123 号墓 5 メドギディア ※縮尺不同

図 10. 関連資料 2

を横方向から表現する場合は、同じ角のなかで鳥頭を向かい合わせ (図 1.2, 4, 10、図 2.2, 3、図 3.4, 11、図 4.4、図 5.6-15、図 6.16-19)、左右の角を表現する場合は左右の鳥頭を中央で向かい合わせており (図 1.1, 6-8、図 3.1-3)、意図的に角の鳥頭を向かい合わせているのが分かる。触角型短剣との対応は偶然ということもあるが、フィリップポフカ 1 号墳で、触角型の剣と中央で左右の鳥頭を向かい合わせる怪獣の立像が共伴しており (図 1.8、図 9.1)、両者が同じ意図でつくられている可能性がある。

これまで見てきたことをまとめると、前 6 世紀頃に草原地帯の東西で動物と鳥頭の合成獣が見られるようになる。前 5 世紀頃になると、鹿と鳥頭の合成獣に触角型の表現が加わったものが草原地帯西部で生まれ、後に草原地帯東部に伝わったのである。

V. 草原地帯東部における展開

最後に、草原地帯西部から伝わった怪獣紋が東部でどのように展開するかについて述べる。まずパジリク 2 号墳の C14 年代から、東部に伝わった年代は前 4 世紀おわりから前 3 世紀はじめにかけての時期である。また、パジリク 2 号墳男性被葬者の刺青に描かれている I B 型と類似した立像が納林高兔で出土していることから、中国国内に I 型が伝わったのも、4 世紀おわりから前 3 世紀はじめと言える。

II 型は I 型同様、パジリク 2 号墳男性被葬者の刺青に II A 型が描かれている。このことから、I 型と同時期に草原地帯西部からアルタイ地域へ II A 型が伝わり、後に中国へ伝播した。この際サグラファジ II -8 号墳出土品のように体が馬で表現される II B 型も (図 8.13)、中国国内に伝わったと考える。

では中国国内の展開はどのようなものだったかという、まず北方系文化と中原系文化では怪獣紋の展開の仕方が違うと言える。北方系文化では、西溝畔 2 号墓で出土した金製飾板の怪獣紋を見ると (図 2.2)、角の先が鳥頭ではなくっており、紋様の退化が確認で

きる。西溝畔 2 号墓は戦国時代後期と考えられ (伊克昭盟文物工作端他 1986 370 頁)、この時期には北方系文化で怪獣紋の退化が始まっていたことが分かる。

一方中原系文化では前漢の茂陵出土香炉に、パジリク 2 号墳男性被葬者の刺青と同様の怪獣紋が描かれている (図 4.3)。北方系文化では戦国時代後期にモチーフが退化しているのに対して、中原系文化では前漢になっても退化が見られないのは非常に興味深い。しかし、この事象にどのような背景が関係しているのかは、現在のところ不明である。

次に、中国国内で I 型は一方向的に紋様が変化していかないという点を指摘する。具体的には章丘洛莊 9 号坑では I B 型と I C 型が共伴しており (図 4.4、図 5.20)、複数の型式が同時期に存在していたと言える。これには上記のように、中原系文化で怪獣紋が退化せずに用いられ続けたことが、関係している。I Cc 型と東黒溝 12 号墓出土の飾板についても (図 5.6-17)、東黒溝 12 号墓の飾板から I Cc 型へと変化したとは限らず、両者は同時期の可能性も考えられる。

VI. 小結

以上、北方系文化の怪獣紋について考察を行ってきた。本稿の考察によって、怪獣紋に地域性があること、草原地帯西部の方が東部よりも早い時期に怪獣紋が見られること、前 6 世紀には怪獣紋の祖型が草原地帯の東西に存在することが分かった。草原地帯東部については、中国国内で北方系文化と中原系文化で、I 型怪獣紋の捉え方が異なっていたこと、複数の型式が同時期に存在していたことが分かったが、どのような背景を反映しているのかまでは明らかにできなかったため、今後の課題としたい。

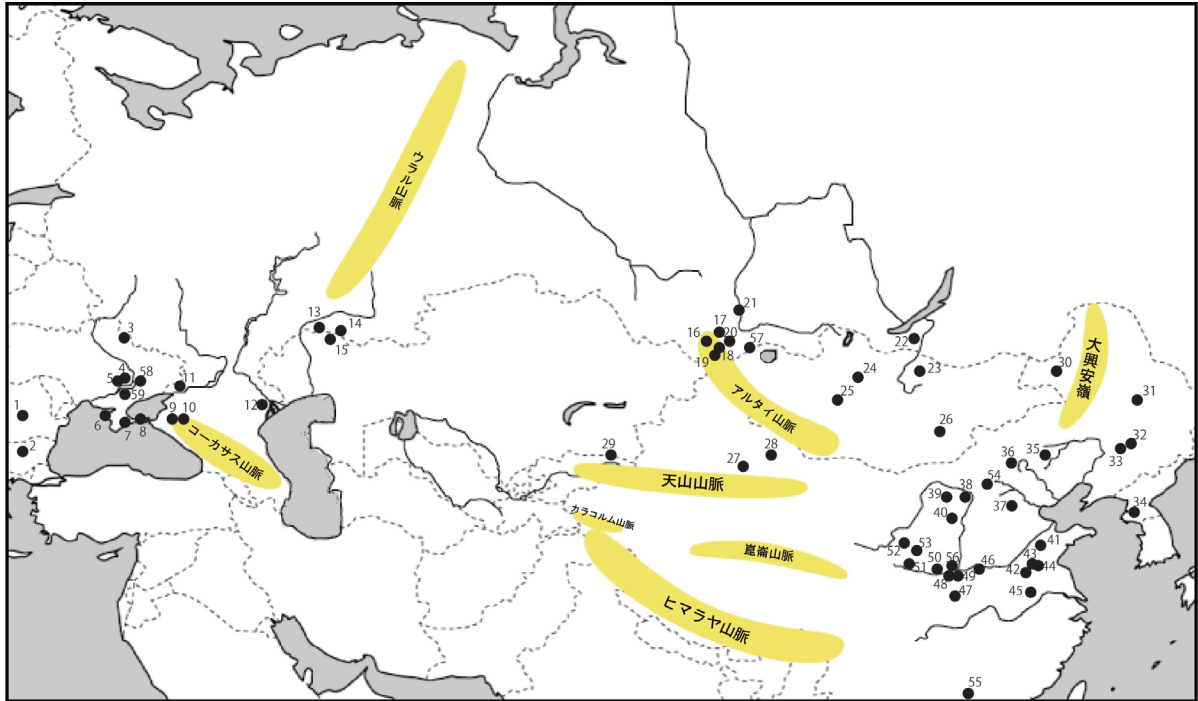


図 11. 関連遺跡

- 1 ドボリイ・デ・ジョス 2 ガルチノヴォ 3 アクシュティンツィ 2 号墳 4 オーストラヤ・モギーラ
 5 ザヴァツカヤ古墳 6 アクメチェット 7 ニンファエム 6 号墓 8 イレイチェヴェ 1 号墳 6 号墓坑
 9 クラスノヤル 10 ウリヤップ 11 エリザベートスカヤ, ウシャコフスカ古墳 12 ホシュウトヴォ 13 フィリッポフカ
 14 ボクロフカ 15 クルコヴァ 16 カタンダ 17 パジリク 18 ヴェルフ・カルジン 19 アク・アラハ 20 ウランドウリク
 21 マリヤソヴォ 22 デレストウイ 23 ノイン・ウラ 24 アルハンガイ 25 バヤンホンゴル 26 ドルノゴヴィ
 27 吐魯蕃市艾丁湖 28 東黒溝 29 イッシク 30 呼倫貝爾 31 大道三家子 32 彩嵐村 33 西岔溝 34 梧野里土
 35 翁牛特旗 36 太僕寺旗 37 辛莊頭 30 号墓 38 西溝畔 39 阿魯柴登 40 納林高兔 41 章丘洛莊 42 保安山 43 劉執墓
 44 獅子山楚王陵 45 北山頭 1 号墓 46 后川村 47 明清村 48 百樂氏 34 号墓 49 三店村 50 茂陵 51 馬家塬
 52 倒墩子墓地 53 三營郷, 陳陽川村, 白楊林村, 潘家莊 54 白家灣 55 銀山嶺 56 枣廟 57 サグラファジ II-8 号墳
 58 ザポロジエ・クルガン 59 ソローハ

この度、高濱秀先生が古希になられたことを、心よりお慶び申し上げます。昨年の考古学大会ではこれまでと全くお変わりなく、精力的に研究を続けられていらっしゃることに、敬服いたしました。自分自身も先生のように真摯に研究と向かい合えるよう、努力していきたいと思ひます。

引用文献

欧文

- Akishev, K.A. 1978 Курган иссык : искусство саков Казахстана Moskva.
 Artamonov. M. I 1973 Сокровища саков Moskva.
 Aruz, J. 2000 *The golden deer of Eurasia Scythian and sarmatian*.
 Bunker, E.M 1997 *Ancient bronzes of the eastern Eurasian steppes from the Arthur M. Sackler collections*, New York.
 Bunker E. C, Watt. James C.Y, and Zhixim. S 2002 *Nomadic art of the eastern Eurasian steppes*, New York.

Chernenko E. V 1981 Скифские лучники Kiev.

Davis-Kimball. J and Yablonsky L.T 1995/96 Excavation of Kurgans in the Southern Orenburg District, Russia *Silk Road art and archaeology* vol.4 p1-12.

Devlet.M. A 1980 Сибирские поясные ажурные пластины : II в. до н.э.-I в. н.э. Археология СССР Moskva.

Ginters.W 1928 *Das schwert der skythen und sarmaten in südrussland*, Berlin.

Grach.A.D 1967 Могильник Саглы-Бажи II и вопросы археологии Тувы скифского времени Советская археология 1967-3, pp.215-233.

Gutsalov.S.Y 2010 Погребальные сооружения могильника кырк-о́а II в западном казахстане Российская археология 2010-2 pp. 51-66.

Hajdas.I, G.Bonani, Slusarenko.I.Y, and Seifert 2004 Chronology of Pazyryk 2 and Ulandryk 4 kurgans based on high resolution

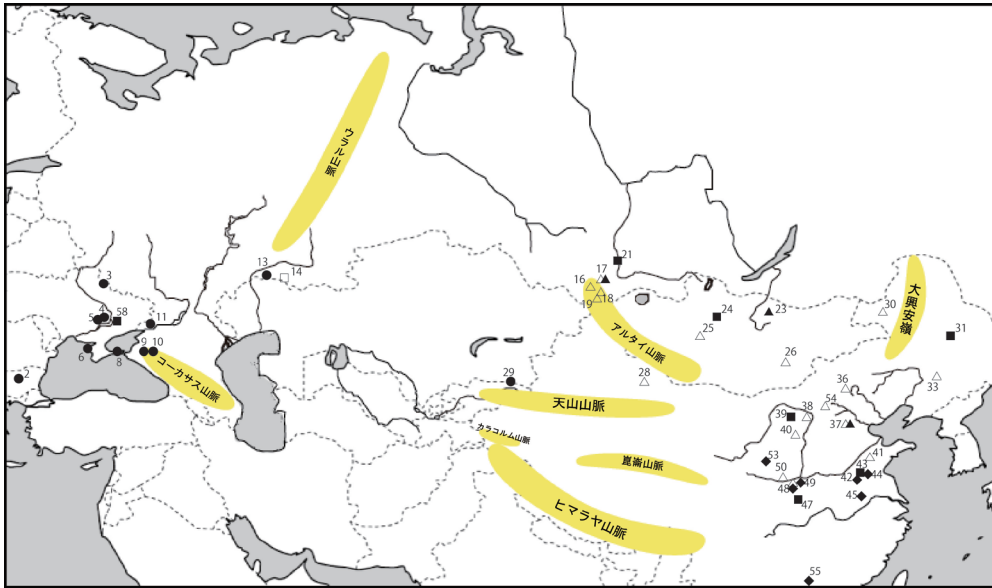


図 12. I 型関連遺跡

●A 型 △B 型 ◆C 型 ■D 型 ▲E 型

- 2 ガルチノヴォ 3 アクシュティンツィ 2 号墳 4 オーストラヤ・モギーラ
 5 ザヴァツカヤ古墳 6 アクメチェット 8 イレイチェヴェエ 1 号墳 6 号墓坑 9 クラスノヤル 10 ウリヤツプ
 11 エリザベートスカヤ 13 フィリッポフカ 14 ボクロフカ 16 カタンダ 17 バジリク 18 ヴェルフ・カルジン 19 アク・アラハ
 21 マリヤソヴォ 23 ノイン・ウラ 24 アルハンガイ 25 バヤンホンゴル 26 ドルノゴヴィ 28 東黒溝 29 イツシク
 30 呼倫貝爾 31 大道三家子 33 西岔溝 36 太僕寺旗 37 燕下都 38 西溝畔 39 阿魯柴登 40 納林高宛
 41 章丘洛莊 42 保安山 43 劉執墓 44 獅子山楚王陵 45 北山頭 1 号墓 47 明清村 48 百樂氏 34 号墓 49 三店村 50 茂陵
 53 三營郷 54 白家湾 55 銀山嶺 58 ザポロジエ・クルガン

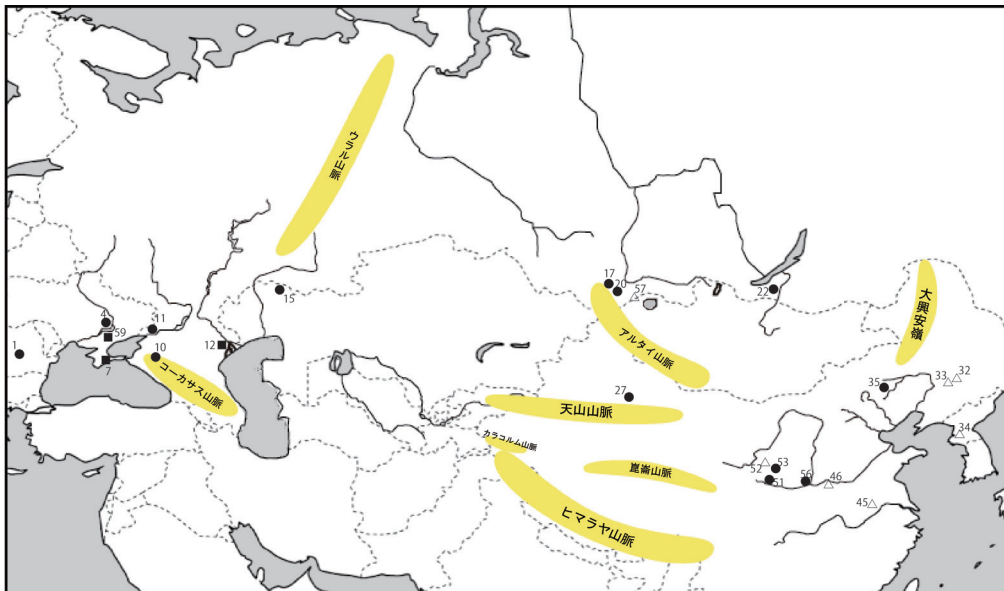


図 13. II 型関連遺跡

●A 型 △B 型 ■C 型

- 1 ドボリイ・デ・ジョス 4 オーストラヤ・モギーラ 7 ニンファエム 6 号墓 10 ウリヤツプ 11 ウシャコフスカ古墳
 12 ホシュウトヴォ 15 クルコヴァ 17 バジリク 20 ウランドウリク 22 デレストウイ 27 吐魯蕃市艾丁湖 32 彩嵐村 33 西岔溝
 34 梧野里土 35 翁牛特旗 45 北山頭 1 号墓 46 后川村 51 馬家塚 52 倒墩子墓地 53 陳陽川村, 白楊林村, 潘家莊
 56 枣廟 57 サグラファジ II-8 号墳 59 ソローハ

- radiocarbon dating and dendrochronology - a step towards precise dating of Scythian burials. Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia. pp.107-116.
- Mantsevich. A. P. 1976 Находка в Запорожском кургане Скифо-сибирский звериный стиль в искусстве народов Евразии pp.164-193.
- Mantsevich. A. P. 1987 Курганы Солоха.
- Il'inskaia, V. A. and Terenozhkin, A. I 1983 Скифия VII-IV вв. до н.э. Kiev
- Menghin. W., Nawroth. M., Nagler. A., and Parzinger. H. 2007 *Im Zeichen des goldenen Greifen : Königsgräber der Skythen*. München. Berlin
- Parzinger. G. 2002 Германский археологический институт : задачи и перспективы археологического изучения евразии Российская археология 2002-3 pp.59-78.
- Piotrovskii, B. B. et al. 1986 *Scythian art : the legacy of the Scythian world : mid- 7th to 3rd century B.C.* Leningrad
- Plicht. J. V. D. 2004 Radiocarbon, the calibration curve and Scythian chronology Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia. pp. 45-61.
- Polos'mak. N. V. 2001 Всадники Укока Nobosibirsk.
- Purevjav. E. and Diimaajav. E. 2011 Тэнгэрийн Илд Ulaanbaatar.
- Rudenko. S. I. 1970 *Frozen tombs of Siberia*, Beley and Los Angeles.
- Salmony. A. 1933 Sino-Siberian art in the collection of C. T. Loo Thailand.
- Shilov. V. P. 1966 Ушаковский курган Советская археология 1966-1 p.174-191.
- Smirnov. K. F. 1961 Вооружение Савроматов Moskva.
- So. J. F. and Bunker. E. C. 1995 *Traders and raiders on China's northern frontier*, Seattle and London.
- Venedikov. I. & Gerasimov. T. 1973 Тракийското изкуство Sofiya.
- Vickers. M. 1979 Scythian treasures in Oxford University of Oxford.
- Vulpe. A. 1990 Die Kurzschwerter, Dolche und Streitmesser der Hallstattzeit in Rumänien Germany.
- Yablonsky. L. T. 2014 Экипировка раннесарматского элитного воина (по материалам филипповских могильников) Российская археология 2014-2 pp. 27-38.
- 和文・中文**
- 安徽省文物考古研究所 巢湖市文物管理所 2007 『巢湖漢墓』文物出版社。
- 伊克昭盟文物工作隊 內蒙古文物工作隊 1986 「西溝畔戰國墓」『鄂爾多斯式青銅器』351-365 頁。
- 梅原末治 1960 『蒙古ノイン・ウラ發見の遺物』東洋文庫。
- 梅原末治 藤田亮策 1986 『朝鮮古文化綜鑑』第三卷 名著出版社。
- 河南省商丘市文物管理委員會 河南省文物考古研究所 河南省永城市文物管理委員會 2001 『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社。
- 河北省文物研究所 1996 『燕下都』文物出版社。
- 甘肅省文物考古研究所 清水縣博物館 『清水劉坪』文物出版社。
- 吉林省文物志編委會 1987 『東遼縣文物志』長春。
- 廣西壯族自治區文物工作隊 1978 「平樂銀山嶺漢墓」『考古學報』1978-4 467-487 頁。
- 黑龍江省博物館 齊齊哈爾市文管端 1988 「齊齊哈爾市大道三家子墓葬清理」『考古』1988-12 1090-1098 頁。
- 濟南市考古研究所 山東大學考古系 山東省文物考古研究所 章丘市博物館 「山東章丘市洛莊漢墓陪葬坑的清理」『考古』2004-8 3-13 頁。
- 山西省博物館 1999 『山西省博物館館藏文物精華』山西人民出版社。
- 徐州博物館 「徐州西漢宛侯劉執墓」『文物』1997-2 4-21 頁。
- 新疆文物考古研究所 西北大學文化遺產與考古學研究中心 「新疆巴里坤縣東黑溝遺址 2006-2007 年發掘簡報」『考古』2009-1 3-27 頁。
- 陝西省考古研究所 1986 「陝西銅川東廟秦墓發掘簡報」『考古與文物』1986-2 7-17 頁。
- 陝西省考古研究所 2006 『西安北郊秦墓』三秦出版社。
- 早期秦文化聯合考古隊 張家川回族自治區博物館 2009 「張家川馬家塬戰國墓地 2007-2008 年發掘簡報」『文物』2009-10 25-51 頁。
- 孫守道 1960 「匈奴西岔溝文化古墓群的發現」『文物』1960-8, 9 25-32 頁。
- 高濱秀・岡村秀典編 2000 『世界美術大全集 東洋編 第1卷 先史・殷・周』小学館。
- 中國社會科學院考古研究所 1994 『陝西東周秦漢墓』科學出版社。
- 中國青銅器全集編輯委員會 1995 『中國青銅器全集 15』文物出版社。
- 中國美術全集編纂委員會 2010 『中國美術全集 金銀器玻璃器』黃山書社。
- 田金 郭素新 1986 「阿魯柴登發現的金銀器」『鄂爾多斯式青銅器』342-350 頁。
- 東京國立博物館 1997 『大草原の騎馬民族—中國北方的青銅器—』株式會社東京美術。
- 東京國立博物館 朝日新聞社 2004 『中國國寶展』朝日新聞社。
- 東京國立博物館 2005 『中國北方系青銅器』竹林舎。
- 富山縣 高岡市 高岡市博物館 1989 『中國遼寧省文物展』富山スガキ株式會社。
- 北京市文物研究所 2007 『軍都山墓地 玉皇廟』文物出版社。
- 內蒙古文物工作隊 1986 「毛慶溝墓地」『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社。
- 寧夏固原博物館 2004 『固原歷史文物』科學出版社。
- 寧夏文物考古研究所 中國社會科學院考古所寧夏考古組 同心縣文物管理所 1988 「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古學報』1988-3 333-356 頁。
- 日本放送協會 NHK プロモーション 2000 『中國文明展』NHK。
- 哈密博物館 2013 『哈密文物精粹』科學出版社。
- 福岡市博物館 西日本新聞社 2005 『アルタイの至寶展』西日本新聞社。
- MIHO MUSEUM 1997 『Miho museum, south wing 南館 図録』

Miho museum.

八木聡 2014 「中国北方系青銅短剣の編年と地域間交流」『ユー
ラシアの考古学』六一書房 129-143 頁.

楊海莉 李強 「湖北竹山県博物館收藏的一件西漢帶飾扣」『文物』
2010-9 77 頁.

楊暉 2004 「內蒙古呼倫貝爾草原發現青銅器」『考古』2004-4
93-96 頁.

予平 戴戈 「陝西省博物館收藏的匈奴銅飾牌」『文博』1985-5
38-42 頁.

李蕭 2006 『吐魯番文物精粹』上海辭書出版社.

龐昊 1998 「翁牛特旗發現兩漢銅牌飾」『文物』1998-7 42-43,78
頁

遼寧省文物考古研究所 朝陽市博物館 2010 『朝陽袁台子』文物
出版社.